

JASE

現代性教育 研究ジャーナル

MONTHLY JOURNAL of SEX EDUCATION TODAY

2021年
No. 129
2021年12月15日(毎月15日)発行

日本性教育協会
THE JAPANESE
ASSOCIATION
FOR SEX EDUCATION

〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル Tel.03-6801-9307 Mail info_jase@faje.or.jp URL https://www.jase.faje.or.jp 発行人 石川哲也 編集人 中山博邦
© JASE. 2021 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

SEE性教育アカデミー 2021報告 …………… 1	性教育の現場を訪ねて⑧ …………… 12
北東北性教育研修セミナー2021秋報告 …………… 7	今月のブックガイド …………… 14
いつきの“ヒューマン・ピーニング”⑨ …………… 10	JASEインフォメーション …………… 15
多様な性のゆくえ⑥ …………… 11	

● SEE 性教育アカデミー 2021 報告

『国際セクシュアリティ教育テクニカル・ガイダンス』について学ぶ 若者のニーズに応える包括的性教育

SEE 共同代表、大阪大学大学院准教授 野坂 祐子

はじめに

～包括的性教育（CSE）への関心の高まり～

ユネスコを筆頭に複数の国連機関が協働し、性教育に関するものとしては初めてとなる『国際セクシュアリティ教育テクニカルガイダンス』（以下、『ガイダンス』とする）が2009年に発表された。約10年後の2018年にその改訂版が発表されたのに前後して、日本語訳（浅井春夫ら訳、明石書店）が出版され、教育現場にとどまらず、一般にも広く「包括的セクシュアリティ教育」（以下、CSEとする）という言葉が知られるようになってきた。“おうち性教育ブーム”のなか、CSEは一つのトレンドとして「性教育は5歳から」「人間関係を学ぶ取り組み」などと紹介されることも多い。今や、「性教育後進国」とみなされている日本の現状を打開するアプローチとして、CSEに寄せられる期待も高いように感じられる。

『ガイダンス』の内容は、子どもの発達をふまえて、権利や安全、健康に関するさまざまな領域が交差し、体系的な学習が積み上げられるように工夫されている。改訂版では、ジェンダー平等の実現に向けた内容が充実し、SDGs（持続可能な開発目標）の目標4「すべての人々への包摂的かつ公正な質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する」ための方策としても位置付けられた。

とはいえ、性はそれぞれの国や社会の文化や価値と切り離せないもの。風習や規範、法制度とも深く関連しているのに、どうやって『ガイダンス』は策定されたのだろうか。包括的といっても、性にまつわる事象が網羅されているわけではなく、選定においてはトピックや内容が取捨選択されたはず。こうした策定プロセスにかかわる秘話をお聞きしながら、『ガイダンス』をさらに深く理解しようという主旨で、SEE（Sexuality Education & Empowerment：東優子・野坂祐子・吉田博美）主催のセミナーでは、副題を「あ

れこれ聞いちゃおう、ガイドンス策定の裏話!」として、ユネスコのジャネル・ボブ (Janelle Babb) 氏を講師にお招きした。



ジャネル氏は、ユネスコ・バンコク、アジア・太平洋地域教育局インクルーシブで質の高い教育部門健康とウェルビーイングのための教育、地域アドバイザーであり、『ガイドンス』の改訂作業をサポートされた。

本稿では、日本性教育協会の協賛を得て、2021年10月16日にオンラインで開催した「『国際セクシュアリティ教育テクニカル・ガイドンス』について学ぶ」セミナーの概要を報告する。約40名の参加があり、事前収録されたジャネル氏の講演と、小貫大輔（東海大学国際学科教授）・東優子（大阪府立大学教育福祉学類教授）両氏と講師とのダイアログを視聴したあと、ライブでジャネル氏との質疑応答が行われた。

『国際セクシュアリティ教育ガイドンス』とは

前述のように、初版（2009）は、性教育に関する初の国際的なガイドンスであり、ここでいう「性教育」はCSE（包括的セクシュアリティ性教育）を意味する。『ガイドンス』は、若者のライフ・スキルの醸成

を目的とするCSEの設計と導入に活用された。その後、CSEの進展に伴い、内容の見直しとアップデートが必要となり、新たなエビデンスに基づいて提案されたのが改訂版である。

この『ガイドンス』の改訂プロセスと新しくなった内容について、講師は以下のように説明された。

改訂版の策定にあたり、ユネスコは2016年に英国オックスフォード大学のCenter for Evidence-Based Interventionにエビデンス・レビューを委託し、教育、保健、青少年育成、人権、ジェンダー平等の分野で活躍する世界各国の専門家からなる諮問委員会に改訂作業の監督を依頼した。また、初版についてのオンライン調査やフォーカス・グループ・ディスカッション、国際会議などを通して、関連する政府省庁、民間団体職員、若者、さまざまなステークホルダーの意見を聴取した。このように、改訂作業は、最新のエビデンスに基づきながらも、実践者の経験と学びも反映しながら進められた。

初版で用いられたテクニカル・ツールは引き継がれ、あらゆる学習者を対象としたCSEプログラムの計画、提供、モニタリング方法を概説している。『ガイドンス』はカリキュラムではなく、カリキュラム策定のプロセスにおいて、国またはそれに準じたレベルで関係者に活用されるものである。各国が自発的に利用するもので、強制するものではない。「お仕着せ」ではなく、

図表1 CSEに対する懸念や誤解への対応（配布資料より）

CSE への懸念	対応
CSE は初交年齢の低下につながる	CSE は、性行動開始の低年齢化や性交頻度の増加につながらず、むしろ開始年齢の遅延やより責任ある性行動につながる
CSE は子どもたちの「純真さ」を奪う	エビデンスが示すところでは、学校教育を通じて、科学的に正確で、偏見がなく、年齢や発達段階に応じた情報を得ることは、子どもたちにとって有益である
CSE は（伝統）文化や宗教に反する	人権に反する否定的な社会規範や有害な因習に対処しつつも、各地域の文化・文脈に適合したコンテンツにするためには、CSE プログラムに対する文化管理の支持を得る必要がある
保護者が学校での性教育に反対する	人権に反する否定的な社会規範や有害な因習に対処しつつも、各地域の文化・文脈に適合したコンテンツにするためには、CSE プログラムに対する文化管理の支持を得る必要がある
CSE を教えることは、教師にとってあまりにも難しい	ほとんどの教師は CSE を教えるためのスキルをすでに持っており、（そうでなくとも）研修を受けることができる
CSE は他の科目（生物、ライフスキル、公民教育）ですでに網羅されている	効果的な CSE は、包括的なトピック、態度、スキルに基づく学習成果を網羅するもので、それらは他の科目に必ずしも含まれていない
若者はすでに、インターネットやソーシャルメディアを通じて、性やセクシュアリティに関するあらゆることを知っている	オンラインメディアは、必ずしも年齢に応じたものでなく、エビデンスに基づいた事実を提供するものでもない。CSE は、健全な議論の場を若者に提供するものである
CSE は、若者をオルタナティブなライフスタイルに誘導する手段である	CSE の大原則は、誰かの判断で取捨選択されることなく、誰もが自分の健康とウェルビーイングに関連する正確な情報とサービスを受ける権利があるということにある

それぞれに異なる状況や多様性をふまえ、若者の健康とウェルビーイングに役立てるものというのが『ガイドンス』の位置づけである。

重要なのは、若者が受ける性教育の中身であり、実施場所が学校の中か外か、教育がフォーマルかインフォーマルかは問わない。下記のような CSE への懸念を理解し、誤解に対して対応することが重要である(図表 1 参照)。懸念する声には、知識不足によるものだけでなく、子どもや若者の利益を考えるがゆえのこともある。一方、意図的に流布された誤謬が原因のこともある。エビデンスと共に CSE への対抗言説を知ることが対応策となり、プログラムの設計にも役立つ。

改訂版『ガイドンス』の新しい特徴

改訂版では、ポジティブなアプローチによってセクシュアリティが紹介されている。CSE は生殖やリスク、病気に関する教育に留まるものではない。むしろ、人権と男女平等の枠組みに位置づけられるものであり、複数の SDGs の達成にセクシュアリティ教育が貢献する。

CSE の新たな定義は、「性の認知的、情緒的、身体的、社会的側面について教え、学ぶカリキュラム・ベースのプロセス」であり、その目的は、子どもや若者に知識、スキル、態度、価値観を身につけさせ、健康、ウェルビーイング、尊厳を実現する、尊敬に値する社会的・性的関係を築く、自分の選択が自分や他人のウェルビーイングにどのような影響を与えるかを考える、生涯

を通じて自分の権利を理解し、その保護を確保するといった力を与えるものである。

CSE は「教育」であり、行動変容のコミュニケーションでもなければ、健康増進の勧めでもない。科学的に正確であり、段階的でスパイラルに行われること、学習者の年齢や発達段階に応じており、カリキュラムに基づいていること、そして包括的なものという特徴を有する。権利基盤型アプローチであり、社会的・ジェンダー的規範の形成と変革に影響を与え、健康的な意思決定を可能にするための能力開発、認知的学習、社会的・情緒的学習の観点から、若者をエンパワーするものである。

ガイドンスのキーコンセプトは、初版の 6 つから 8 つに増え、内容が充実した(図表 2 参照)。初版同様、スパイラル型アプローチをとり、複雑な概念や課題を段階的に提示することで、学習者の認知能力や社会的・情緒的スキルを向上させるものである。

改訂版の新しい特徴の一つは、学習目標とともに、知識・態度・技能それぞれにおける学習成果を明示している点である。これらのキーコンセプトを直線的に教えるのではなく、同時進行させる。重要なのは、若者のニーズに応えることであり、若者が CSE を必要とし、望んでいると理解することである。

年齢に応じた段階的な教育を提供し、質の高い教育の中で、若者が幅広く学んでいけるものにする。思春期から青年期への移行期には、様々なリプロダクティブ・ヘルスの問題を扱う必要がある。ほかに、テクノロジー、ICT、デジタルメディア、メンタルヘルス、

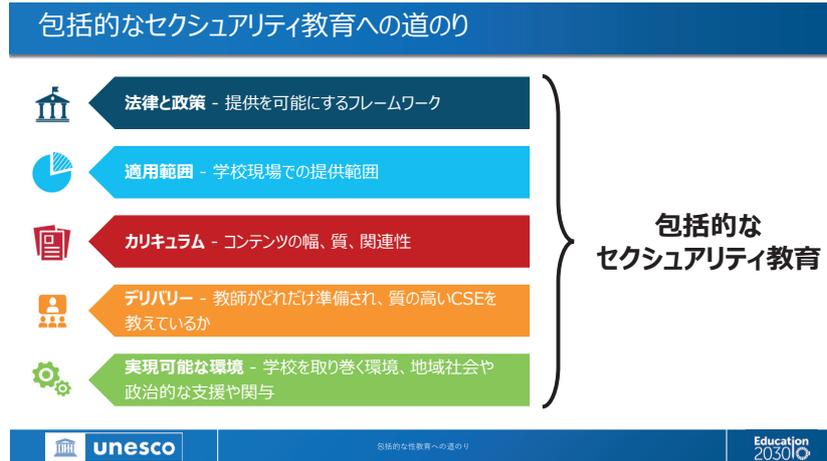
図表 2 図

ガイドンスの新しい特徴とは？

- キーコンセプト、トピック、学習目標**
- ✓ **地域に適合したカリキュラムを開発するためのキーコンセプト、トピック、学習目標をまとめた包括的なセット**
 - ✓ **4つの年齢層(5~8歳、9~12歳、12~15歳、15~18歳以上)において、年齢に応じた学習目標を設定し、年齢や能力に応じて複雑化するように論理的に順序付けられている。**
 - ✓ **知識、態度、スキルの3つの学習領域に焦点を当て、8つのキーコンセプトを同時に教える。**

<p>キーコンセプト1 人間関係</p> <p>トピック: 1.1 家族 1.2 友情、愛情、恋愛関係 1.3 寛容、包摂、尊重 1.4 長期的関係性と親になるということ</p>	<p>キーコンセプト2 価値観、人権、文化、セクシュアリティ</p> <p>トピック: 2.1 価値観、セクシュアリティ 2.2 人権、セクシュアリティ 2.3 文化、社会、セクシュアリティ</p>	<p>キーコンセプト3 ジェンダーの理解</p> <p>トピック: 3.1 ジェンダーとジェンダー規範の社会構構性 3.2 ジェンダー平等、ジェンダーステレオタイプ、ジェンダーバイアス 3.3 ジェンダーに基づく暴力</p>
<p>キーコンセプト4 暴力と安全保障</p> <p>トピック: 4.1 暴力 4.2 同意、プライバシー、からだの保全 4.3 情報通信技術 (ICTs) の安全な使い方</p>	<p>キーコンセプト5 健康とウェルビーイング (幸福) のためのスキル</p> <p>トピック: 5.1 性的行動における規範と仲間の影響 5.2 意思決定 5.3 コミュニケーション、拒絶、交渉のスキル 5.4 メディアリテラシー、セクシュアリティ 5.5 援助と支援を見つける</p>	<p>キーコンセプト6 人間のからだと発達</p> <p>トピック: 6.1 性と生殖の解剖学と生理学 6.2 生殖 6.3 前期思春期 6.4 ボディイメージ</p>
<p>キーコンセプト7 セクシュアリティと性的行動</p> <p>トピック: 7.1 セックス、セクシュアリティ、生涯にわたる性 7.2 性的行動、性的反応</p>	<p>キーコンセプト8 性と生殖に関する健康</p> <p>トピック: 8.1 妊娠、避妊 8.2 HIVとAIDSのスティグマ、治療、ケア、サポート 8.3 HIVを含む性感染症リスクの理解 認識、低減</p>	

図表 3



心理社会的ウェルビーイング、アルコール、タバコ、薬物問題なども扱われている。参加型で実施できる質の高いプログラムを設計し、若者の生活に意図した影響をモニタリングしていけるようにしたい。

『ガイダンス』の実施と各国のCSEプログラムの教訓

「包括的セクシュアリティ教育への道のり 世界白書」では、CSEの導入・実践をめぐる世界の動向が示されている。法律と政策、適用範囲、カリキュラム、デリバリー、実現可能な環境という5つの分野について調査したものであり、現状を把握することができる(図表3参照)。

このうち、「適用範囲」についてCSEの実施率では、調査対象国の約65% (71カ国) が中等学校の4分の3以上で実施していると回答したが、楽観的にして不十分といえる。教育の質と実践の実態は複雑であり、政府レベルで報告されたものと現場の実情には乖離があるだろう。CSEの定義や理解の違いも一貫しておらず、実際に、多くの人が自分の受けた性教育が不十分であったと述べている。

また、「カリキュラム」の幅・質・関連性に着目すると、85%の調査対象国が性教育の内容やトピックに関連する内容を含んでいると回答したものの、別のデータでは、ジェンダーを考慮し、ライススキル基盤のHIVとセクシュアリティ教育の実施率は55%と報告されている。これも実際に何が教えられているのか、「包括性」がどう理解されているのか、結論づけるには不十分である。

しかし、多くの国で正式な教育カリキュラムに性教

育が組み込まれていることは注目に値する。主に、中等教育で性教育が実施されており、アプローチも多様である。独立した科目として性教育を行っている国はほとんどなく、他と統合あるいは融合させているものがデータから読み取れる。あらゆるトピックを全面的に含んでいる国はなく、より多くの国で実施されているのはHIV/AIDSを含む性感染症についてであった。CSEを実現するには、さらなる進歩が求められる。

現代の若者は、性に関する情報を得るためにデジタルメディアを使用するのが、男女問わず一般的である。オンラインを活用する若者が急増しており、教員や大人の目が届かないこともある。機会と脅威のバランスが大切である。デジタルメディアの発展によって、性教育の入り口が一つ増えたわけだが、潜在的なリスクも認識する必要がある。アクセシビリティが確保されていることで、パーソナライズされた、より魅力的なコンテンツを得ることができる一方、学習という観点でみた場合、若者が何を学んでいるのかを評価するのは容易ではなく、アクセスできない人もいる。年齢に見合った情報をコントロールするのは難しく、社会的・情緒的な学習領域ともなればより難しい問題になる。

今後の展開は、質を担保しつつ、世界中でCSEを広げていくことである。質の高いCSEの提供につながるよう、CSEを義務化し、忠実に実行し、誰もがアクセスできるような政策構想を実現させることが求められる。カリキュラム内容が若者のニーズに沿っているか、エビデンスに対応したものであるか、教員の支援やピアサポートを通じた支援等を行い、性教育パッケージに耐え、神話や誤謬を払しょくしていきたい。幅広い関係者や実務家からフィードバックを収集していくつもりである。

ジャーネル氏とのダイアログ

小貫：2009年の最初の『ガイドンス』から10年も経たないうちに改訂版を出したのは、この間に活発な議論がなされ、ユネスコと他の国連機関が協力し、CSEについて国際的な合意形成に至ることができたからなのですね？

ジャーネル（J・B）：その通りです。ユネスコと他の国連機関の共催でグローバル・パートナーシップ・フォーラムを開催してきました。それだけCSEが注目されており、広範な人々や事柄に影響を与える重要なものだと認識されるようになりました。CESによってもたらされる成果は多岐にわたり、教育効果、健康やウェルビーイングなど、その影響は個人だけでなく社会全体に及びます。ジェンダー平等、安全、平和、寛容で尊厳に満ちた公正な社会につながるものであり、ステークホルダーの重要性にも言及されています。国際教育の分野でもCSEは高く評価されています。

東：1994年の「カイロ行動計画」を例にしても、性の健康と権利に関する文書については合意形成が難しかったことが知られています。『ガイドンス』の策定プロセスでも合意形成が難しい点はありましたか？

J・B：もちろん。招聘されたメンバーの間で、性教育の重要性については共通認識がもたれていたわけですが、『ガイドンス』をどう使えばよいか、自国や地域に利益をもたらすものか、分野や文脈も多様であるため、議論は大いに盛り上がりました。国際レベルの公的文書では、各国・地域の事情をすべて反映することは不可能であるわけですが、それぞれにとって有意義なものにすることはできます。それを各国の文脈に合わせて、どこでも使える普遍性があるのが『ガイドンス』の特徴です。ただし、『ガイドンス』では、中絶は「合法である」と書かれているものの、合法ではない国もあり、用語や表現には気を遣い、性教育の阻害要因にならないようにしました。年齢コーホートに関わるところも難しく、同じ区分にある年齢でも、9歳と12歳では教える内容は異なるため、妥当性を確認するのが煩雑でした。

小貫：ユネスコでは「アウト・オブ・スクール」（学校以外での性教育の実践）に関する『ガイドンス』も発表していますね。就学前の幼児や未就学児への性教

育では、何が重視されていますか？

J・B：「アウト・オブ・スクール」といっても多様で、その役割は補完的なものです。学校で性教育がなされていないとか不十分である場合に、それを補うという位置づけです。あらゆる学習機会を逃さないことが大切だと考えています。

東：『ガイドンス』の副題に「エビデンス・ベースド」（科学的根拠に基づく）ではなく、「エビデンス・インフォームド」という言葉を採用した意図はどこにありますか？（※筆者注：日本語訳では「科学的根拠に基づく」が採用されている）

J・B：効果的なCSEプログラムの特徴を裏付けるものとして科学的根拠があるのは確かなのですが、プログラムに欠かせないトピックやそれを扱う時期については、エビデンスが少ないのが実情です。また、実践者の経験や学びは、システムティックレビューに引けを取らない有効性をもつと考えられるからです。

小貫：日本は過去15年ほど性教育を停滞させる状況が続いています。その日本に何かメッセージをいただけますか？

J・B：エビデンスが示唆しているのは、保守的な地域でもセクシュアリティ教育を行うのは可能だということです。（『ガイドンス』に示された）学習領域をすべておさえていなくても、性教育は可能なのです。バックラッシュを経験しているのは日本に限った話ではありません。重要なのは、そうしたバックラッシュに政府が揺らぐことなく、性教育が必要だという方針で、性教育を忌避したり、懸念したりする声と対話し、納得できるものを一緒につくるよう呼びかけることです。時には妥協が求められることもあるでしょう。それでも、対話を続けることが公平さを担保することにつながるのです。学校での授業にとらわれず、学習の機会を確保することが大事です。

しかし、性教育を装いながら間違った教育内容を伝える動き（「禁欲のみ教育」など）には注意する必要があります。特定の集団がスティグマ化され、セクシュアリティに対する恐怖心を煽るようなリスク基盤のアプローチでは、予防については触れられていません。CSEはすべての人が良質で楽しい生活を送る権利を保証するためのものなので、そうした（肯定的な）アプローチが理想的ですが、実際に性教育を後押ししてきたのは、10代の妊娠やHIV/AIDSなど危機的な健

康問題、つまりリスク対応としての性教育でした。

SDGsの目標4「質の高い教育」をめぐる世界的な取り組みに日本も参加していますね。そこにCSEも位置付けられているため、今後、実践や成果に関する報告も増えていくことが期待されます。若者コミュニティとも連携し、若者をエンパワーし、既存の資源を生かしながら機会を逃さないでほしいと思います。諦めずに性教育を続けていきましょう。

おわりに

～ディスカッションを終えて～

収録内容をもとに、参加者からは「ホリスティックセクシュアリティ教育と包括的性教育の違い」や「CSEでカバーされるトピックス」などに関する質問がなされ、講師やゲストからの応答があった。

最後に、小貫は『ガイダンス』を「リーズナブルな提案」だと評し、東もその点について強調した。ユネスコの『ガイダンス』は「世界の基準」と紹介されることも多く、あたかも最先端をいっているようなものととられる向きもあったが、ジャネル氏の講義からわかるように、異なる宗教・集合体のなかでコンセンサスを得ていくプロセスは、ユニバーサルなもの（普遍性）をどう作るか、「お仕着せ」ではなくコンセンサスが得られるギリギリのラインまで下げたものだと捉えられると述べ、この東による指摘は、参加者にと

っても『ガイダンス』の位置づけをクリアにするものと感じられたようだった。小貫は、CSEには、国や地域ごとの社会的な規範にチャレンジする側面もあり、性に関する価値観の見直しを求めていることになっていると指摘した。

また、東から『ガイダンス』の内容で不足している部分についてだけでなく、クリティカルに読み込む必要もあるとして、例えば、男子のからだへの有害な言説や実践については触れられていない点が指摘された。こうした課題がありながらも、小貫はCSEの世界的取り組みのスピード感を評価し、教育現場でのCSE実践の進展について期待を寄せた。

今回、『ガイダンス』改訂に関わったユネスコのスタッフから国際的な動向とCSEの方向性をうかがったことで、その成果と経験をどのように日本の教育現場に活かしていくべきか、大きな課題が与えられたように感じた。現状の困難さを思うと、この先の道のりの長さに圧倒されそうになるが、ジャネル氏が繰り返していた「できることから、諦めずに」「若者のニーズに応えることが大事」という言葉を共有しながら、CSEに向けて取り組んでいきたいと思う。

SEEでは、2022年2月27日(日)にCSEに取り組む支援者自身の性に対する態度と価値観を見直すSAR (Sexual Attitude Reassessment) をテーマとするワークショップを開催する(15頁参照)。本セミナーの学びを進展させる機会として、ぜひ参加いただきたい。

JASE 性教育・セクソロジーに関する資料室

資料室について

JASE 資料室は国内外の性教育、性科学等に関する文献資料を収集している開架式資料室です。文献資料の数は約6万点以上、現在も日々、増え続けています。性教育、セクソロジーに関する調査、研究のためにご利用いただけます。人間の性に関心がある方、ぜひ足をお運びください。

【閲覧】必ず事前に電話で予約が必要です (tel 03-6801-9307)。貸出業務は行っていません。

【開室日・時間】 しばらくの間、月～金曜日 11:30～16:30

【休室日】 土・日曜日、祝日、年末年始 ※この他、会議等で臨時に休室することがあります。

【コピーサービス】 コピー料金は用紙サイズにかかわらず1枚10円です。著作権法の許容する範囲で行うものとします。

<https://www.jase.faje.or.jp/pub/archive.html>

資料室 利用方法

収集文献 ・資料

統計・調査報告書、ジェンダー・フェミニズム、性教育一般・性教育の歴史的資料、国内雑誌、障害者、セクソロジー (自然科学系、人文・社会学系)、民俗学・文化人類学・風俗、性研究史・性学史、教科書・指導書・学習指導要領、幼児期～青年期、国内学術誌、国際 (海外団体資料・海外学術誌)、高齢者・家族問題、文学・評論・エッセイ・文庫・新書、官公庁資料、JASE 刊行物、映像資料、個人論文、雑誌記事、新聞記事、絵本・写真集・マンガ、江幡・篠崎・朝山・石川・ダイヤモンド文庫、ほか。

<https://www.jase.faje.or.jp/cgi-bin/search1.cgi>